

## 意味することと伝達することの違い

その他のタイトル	What Is the Difference between to Mean and to Communicate ?
著者	木下 蒼一郎
雑誌名	東京大学言語学論集 = Tokyo University linguistic papers (TULIP)
巻	41
号	TULIP
ページ	117-129
発行年	2019-09-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15083/00078583">http://doi.org/10.15083/00078583</a>

# 意味することと伝達することの違い

木下 蒼一朗

キーワード: 非自然的意味 伝達 コミュニケーション 嘘

## 要旨

本稿はコミュニケーションを話し手の意図 (Grice 1957 他) によって特徴付けようとする論者の近年の論点、特に「嘘」に関する論点を整理することを目的としている。まず初期グライスによる「話し手が何事かを意味する」という出来事の分析のうち「非自然的意味」に属するものを見、それに対してストローソンらの提出する反例が「話し手が何事かを意味したとは言えない」とされる基準を、話し手に言い逃れの余地があるという点に求める。次に、コミュニケーションを行為の一形態として定式化することを試みる柏端 (2016) を参考に、話し手の意図を聞き手が評価することがナンセンスになるという点をコミュニケーション一般に見られる特徴として指摘する。最後に、嘘をコミュニケーションでないとする柏端への批判 (三木 2017) を取り上げ、その批判は上の特徴付けを踏まえれば正当でないとし、嘘は非自然的意味だがコミュニケーションではないという主張を行う。

## 1. 初期グライスによる「意味する」という出来事の区別

コミュニケーションに含まれる営みとして誰もが思いつくのは会話である。この「会話」という現象のあり方を分析哲学的な手法で解明しようとした代表的な哲学者はポール・グライスである。グライスは会話を、話し手と聞き手の間で行われる意味伝達の営みであると考え、この営みにおける「話し手が何ごとかを意味する」とはどういった出来事なのかを記述するための理論を考案している (Grice 1957, 1969, 他)。この節では、「意味する」という出来事のグライスによる分析を見る。

グライスは、「意味する」という言葉で表現されるような出来事のありかたには二つの種類があることを指摘し、一つを『『自然的な仕方』意味する』、もう一つを『『非自然的な仕方』意味する』と呼んだ (Grice 1957)。ここにおいて、自然的に意味される意味は「自然的意味」、非自然的に意味される意味は「非自然的意味」と呼ばれる。

グライスの指摘する自然的意味と非自然的意味の差異は複数ある。中でも強力なのは、意味するものと意味されるもの間になんらかの因果性が想定されるか否かという点(事実含意性)である。自然的意味は、ある出来事に対してその原因となる別の出来事を受け手が想定するか、ある出来事と別の出来事に共通する原因を想定することによって受け手にもたらされるような内容である。柏端 (2016) の例を借りるならば、「この赤い頬はりんご病の罹患を意味する」といった言明に登場する「意味する」は、自然的意味を表現している。なぜならばこの言明を行うことが適切であるのは、赤い頬の原因としてりんご病が想定されているような場合だからで

ある。これに対し非自然的意味は、因果を想定することなしに受け手にもたらされるような内容である。たとえば柏端の挙げる「バスのブザーは、そのバスが満員であることを意味する」という言明に登場する「意味する」は非自然的意味を表現している。ここにおいて、バスが満員であるという出来事はブザーの原因になっているわけではない。ブザーは、バスの満員を示すものとして取り決められているにすぎず、バスが満員になったときに鳴るものであるということが人々に知られているというだけである。すなわち、このブザーは規約によってバスの満員を表現する。したがって、ブザーを聞いた人物が「このバスは満員である」という信念を抱くのに、なんらかの因果が想定される必要はない。この点において自然的意味と非自然的意味は異なる。

非自然的意味を受け取った聞き手に因果が想定されていないことを示すものとしてしばしば挙げられるのが、ブザーの故障ないし誤作動がありうるということである。たとえば、「ブザーは鳴っていないが、バスは満員だった」ということと「ブザーは鳴ったが、バスは満員ではなかった」ということはどちらも成立しうる事態である。前者の場合、受け手はブザーの故障を疑い、後者の場合「ブザーが誤って満員を意味した」と判断することができる。これに対し「頬は赤くないがこの人物はりんご病である」とか「頬は赤いがりんご病ではなかった」などといった場合に、赤い頬の故障を疑ったり、「赤い頬が誤ってりんご病を意味した」ものとして了解したりすることはできない。それぞれ「りんご病であるにも関わらず頬が赤くならないような別の原因があるに違いない」とか「その赤い頬はりんご病のそれによく似ているが、実はりんご病によるものではなかったのだ」といった形で、当初想定した因果関係を更新し、別の因果関係の想定を得ることで受け手は溜飲を下げるのである。こうした自然的意味の特徴は「事実含意性」と呼ばれる。たとえブザーが誤作動をおこしたとしてもブザーはやはり満員を意味しており、「ブザーは実は満員を意味していなかった」ということにはならない。しかし、頬が赤いにも関わらずりんご病ではなかった場合には、「その赤い頬は実はりんご病を意味してはいなかった」ということになるのである。すなわち、自然的意味は事実含意性を持ち、非自然的意味は事実含意性を持たない。

## 2. 非自然的意味を特徴付ける重層的な意図

上のような自然的意味／非自然的意味の区別の下、会話において話し手から聞き手に伝達されると考えられている内容<sup>1</sup>は非自然的意味に分類される。グライスは、ブザーがいかなる場合

<sup>1</sup> 非自然的意味はさらに、発話が規約的に持つ意味である「無時間的意味」と、発話が特定の状況において持つ意味である「場面意味」の区別がある。ブザーの例は無時間的意味に属する。満員のブザーはどんな時にどんな場所で発されても満員を意味する。一方で「手を挙げる」という行為はそのようなコード化された意味を単体で持つわけではない。そうした行為の持つ意味は場面意味に属する。手を挙げるという行為が学会の質疑応答の場面で為されたならば、それは行為者には質問の用意があるということの意味する。路上で為されたならば、それは行為者がタクシーに乗りたくて思っているということの意味する。すなわち、場面意味は発話がある特定の場面と話し手の意図に依拠して何事かを意味する場合の非自然的意味である。以下に述べられる非自然的意味の定式化は、厳密には Grice (1969) による場面意味の定式化である。

もバスの満員を意味するようになるまでに、まず当のブザーが「満員を意味するつもりで」用いられる必要があると分析している。いま仮に、上の例でバスの満員を非自然的に意味していたブザーが開発されたばかりだとすると、バスが満員であるという出来事とそのブザーが鳴るといふ出来事には因果的関係もなければ規約的關係もない。このときバス会社が開発されたブザーを目に止め、それを自社のバスに搭載することを思いつく。バスが満員であることを告げるために用いるのである。やがてブザーの搭載されたバスが流通し、ブザーが何を告げるために用いられているのかが共同体において知られるようになれば、その会社のバスはいかなる場合でもブザーによって満員を意味することができるようになる。ここにおいて、バスにブザーを搭載した人物は、乗客がブザーを聞くことによってバスが満員であることを知るように意図していると考えられる<sup>2</sup>。この事例に見られるように、ある特定の記号が何事かを非自然的に意味するという出来事においては、記号を発信する側が、その記号によって聞き手にどのような信念を生じさせようとしているのかという「意図」が重要な位置を占める。この考えの下、グライスは話し手が発話によって何事かを非自然的に意味するときの意図を次のように考えている（現代風の書き下しとして柏端 (2016) によるものを採用した。ただし下線による強調は引用者による）。

[NNM]行為者  $x$  は、 $\varphi$  をもたらすことによって受け手  $y$  に  $\psi$  がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を  $y$  が認識することによってこそ  $\psi$  が  $y$  にもたらされるということをも意図している。<sup>3</sup>

[NNM]は何事かを非自然的に意味している話し手（すなわち、行為者  $x$ ）が持つ意図を述べている。 $\varphi$  は話し手もたらす発話の形であり、ブザー、「手を挙げる」という行為、「マットの上に猫がいる」という発言などが  $\varphi$  にあたる。受け手ないし聞き手  $y$  にもたらされる  $\psi$  は、 $y$  の陥る状態を表している。例えばブザーによってバスが満員であることが非自然的に意味された場合には、「バスは満員である」という信念が  $y$  にもたらされることが意図されており、さらに、「満員であるから乗らずに次の便を待ちなさい」という命令に  $y$  が従うことをも意図されている考えることができる（実際、ブザーが鳴っているのに乗ることを諦めない聞き手は、ブザーの意味を理解していないと判断されるはずである）。このとき聞き手にもたらされている信念や命令に従うという態度の全部が、 $x$  が  $y$  にもたらそうと意図している  $\psi$  である。そして

<sup>2</sup> 意図が「必要である」のかどうかに関しては議論がある。自社のバスに特に何の意図もなくブザーを搭載し、そのブザーがどのようなわけか満員時に鳴らされ続けている共同体があれば、共同体の成員はブザーによってバスの満員を知ることになるからである。ただグライスは、特定の場面における非自然的意味が無時間的な非自然的意味に先立つと考えており (Grice 1968)、そのためには意図が必要だと考えていたようである。

<sup>3</sup> グライス自身は柏端のように [NNM] という形では意図を定式化していないが、Grice (1957, 1969, 他) において同様の趣旨の話し手の意図が述べられている。グライスの考える重層的意図には数度改良が加えられているが、その全てに特徴的な点は、聞き手に  $\psi$  をもたらそうという意図を聞き手が理解することによって初めて  $\psi$  がもたらされるということ在意図する必要性を指摘しているという点である。

最も重要なのは下線部の意図である。この「聞き手が意図を認識することによってその意図を達成しようとする」という点が [NNM] に含まれていることで、私たちは次のような事例を区別することができる。すなわち、x が y に自身の紅潮した頬を見せること (φ) で自身が恥じらっているということ (ψ) を伝えようとするような事例である。この事例において話し手は、[NNM]の下線の引かれていない部分の意図をすべて達成している。しかしその達成はりんご病の例と同じく自然的な仕方では達成される。この達成において「話し手が恥じらっているという信念 (ψ) を y にもたらそうとしている」という意図を聞き手が認識する必要はない。必要がないということと言い換えれば、「話し手が恥じらっているという信念を y にもたらそうとしている」という意図を認識することによってこそ ψ がもたらされるという [NNM] の重要な部分は達成されないということである。したがって私たちが [NNM] に従うならば、このような事例は、話し手が紅潮した頬を見せることによって自身が恥じらっているということを「自然的に意味した」とは言えるかもしれないが、それは「非自然的に意味した」というわけではない、ということになる。

上の事例に対して、典型的な陳述文を発話するという事例は、話し手が何かを非自然的に意味する事例の典型例となる。「そのバスは満員だ」という陳述を例にとると、こうした真偽を問える文の発話において、話し手は第一に「そのバスは満員だ」と発話すること (φ) によって聞き手にそのバスは満員であるという信念 (ψ) がもたらされることを意図している。第二に、第一の意図を聞き手が認識することをも意図している。何故ならば、「私の発言によってバスが満員だとわかってもらいたいが、私の発言によってバスが満員だとわかってもらいたいと思っていることには気づかれない」といった事例は、話し手は聞き手の目を見て発話することとせず、「ああ、このバスは満員なのか」という独り言を、聞き手にわざと聞こえるように行うような事例に相当し、これは典型的な陳述ではないからである。したがって対偶をとると、それが典型的な「面と向かった」陳述であるならば、この第二の意図はほとんど至る所で意図されていると考えられる。そして第三に、話し手は第二の意図が達成されることによってこそ第一の意図が達成されることを意図している。「私の発言によってバスが満員であるとわかってもらいたいが、私の発言によってバスが満員であるということを知ってほしいと思っていることにも気づいてもらいたいが、そのことに気づいたことによってこそバスが満員であるとわかってほしいというわけではない」といった事例は、話し手が自分たちの乗ろうとしていたバスが満員であるということを知りながらバスを指して「あのバスが満員だったら乗れないね」と発話し、聞き手がそのバスに注意を向けることで満員であることを知るような事例である。この事例において、話し手は「あのバスが満員だったら乗れないね」と述べつつバスを指さすこと (φ) によって聞き手に「バスが満員である」という信念 (ψ) がもたらされることを意図しており、さらにその意図に気づいてもらいたいということをも意図している<sup>4</sup>。しか

<sup>4</sup> この事例において聞き手が「よく見たら満員だ、気づけてよかったよ」と言えば、話し手は「私が言わなきゃ気づかなかったでしょ」と反応することがありうる。この反応がありうるのは「私の発言によってバスが満員であるということを知ってほしいと思っていることに気づいてもらいたい」からである。

しながら、聞き手がバスの満員に気づくのは第二の意図を知ることによってこそではなく、話し手の発言と指差しをきっかけにバスの状態を確認することによって達成されることが意図されている。こうした事例は「バスが満員である」という信念をもたらしするための陳述としては典型的な例とは言いがたい<sup>5</sup>。するとやはり対偶を取れば、典型的な陳述においては第三の意図は意図されていると考えることができる。こうして典型的な陳述の事例では [NNM] が意図されていることが示された。すなわち、「そのバスは満員だ」と面と向かって陳述する話し手がそのバスが満員であることを非自然的な仕方の意味するためには、典型的には、話し手によって [NNM] が意図されることが必要であるということである。

### 3. 非自然的意味を特徴付けるのは意図だけではない

たしかに話し手が何事かを非自然的に意味するときには [NNM] が意図されることが必要ではあるが十分ではないと指摘する議論がグライス自身、および Strawson (1964)、Schiffer (1972) らによって提出されている。この節ではグライスによる [NNM] が十分な意図とならない事例に対する Strawson (1964) による [NNM] の改良案を見、さらに、それに対する Schiffer (1972) の批判を見る。

グライス、ストローソンによって提出される、[NNM] が意図として十分でない事例には様々なバリエーションがある。たとえば次のようなある種の「企て」を含む事例がそれに当たる。

行為者 x は最近交際を始めた先輩 y との 3 回目のデートで「そろそろキスくらいしてくれてもいいのに」と思っていたが、y はどうやら奥手らしい。かといって明示的に「キスしてください」とは言いにくい。さらに x は、y がそうした明け透けな態度をとるような相手を好まないということを知っている。そこで x は「デートの途中、y に見えないところでこっそりとリップクリームを塗ってキスされるための準備をする」という自身の姿が何かの拍子に y に目撃されるよう仕向ける。y はそれを目撃することによって、x がキスしてほしいと思っていることを知り、かつ、x はたとえキスしてほしいと思ってもそれを明け透けに言うことを避ける人物であるということを知り、しかもその姿があえてあたかも偶然であるかのように目撃されるよう綿密に企てられたものであるということまで気付く。すなわち、「そこまでして x はキスしてほしいのだ」と y は知ることになり、実質的に依頼は達成されるのである。しかし実のところ「企てに気づかれること」まで x の計画通りであり、y が「x は綿密な企てを行なってまでキスしてほしいのだ」という考えを持つことまですべて x によって企てられていた。(Strawson 1964, Grice 1969 を元に作例)

<sup>5</sup> ただし、「あのバスが満員ならば乗れない」ということは非自然的に意味されているといえる。あくまでも「バスが満員である」ということが非自然的な仕方では意味されていないということである。



このような事例において、行為者  $x$  は「こっそりとキスされるための準備をする自身の姿が偶然  $y$  に目撃されるよう企て、しかもそれが企てであると気づかれること」( $\phi^*$ ) をもたらすことによって、第一に  $y$  に「 $x$  にキスをするという態度」( $\psi$ ) がもたらされてほしい、すなわち「 $y$  にキスされたい」と意図している。第二に、その意図が  $y$  に認識されてほしい、すなわち「 $y$  にキスされたいと思っていることに  $y$  に気づいてもらいたい」と意図している。さらに第三に、第二の意図が達成されることによって第一の意図が達成されることをも意図している。すなわち、「そこまでしてキスしてほしいのだという気持ちに気づいてくれたことによってこそキスしてくれる」という事態の成立を企てているのである。したがって行為者  $x$  は [NNM] の全てを意図している。ではこの事例において、行為者  $x$  は「こっそりとキスされるための準備をする自身の姿が偶然  $y$  に目撃されるよう企て、しかもそれが企てであると気づかれること」によって「私にキスをしてください」という依頼<sup>6</sup>を意味したといえるだろうか。グライス、ストローソンらの考えは一貫して、行為者  $x$  が依頼を「意味したとはいいたくないばかりか、そもそも [彼女が] 何とかを意味したとさえ言いたくない<sup>7</sup>」(Grice 1989; 清塚訳 1998: 144) というものであり、すなわち否である。ではなぜ「意味したとはいいたくない」のだろうか。この「意味したとはいいたくない」というのが単なる気分の表明でないとするれば、この表現は実質的には何を指摘しているのだろうか。Grice (1969) はこの疑問に明確には答えていないが、ここでは特に「 $x$  が言い逃れをすることができるという点において異なる」ということが指摘できる。上に挙げたキスの依頼を行う事例では、行為者  $x$  は明示的に「キスしてほしい」と述べたわけではない。したがって  $y$  に「キスしてほしいのでしょうか？」と問われた場合に「そんなことは言っていない」と言い逃れをすることができる。これに対し、明示的にキスの依頼をした場合に同様の言い逃れはできない。本稿は「意味したとはいいたくない」こと理由の少なくとも一部はこの部分に現れていると考え、この基準を「免責不可能性」と呼ぶことにする。明示的な依頼は免責不可能性を持ち、上記のような「企て」を含む事例は免責不可能性を持たない。

Strawson (1964) はこの「意味したとはいいたくない」事例が非自然的意味に含まれてしまうということを受け、行為者が何事かを非自然的に意味する場合に必要な意図を定義項に追加することを提案している。それを [NNM] の形に倣って表記すると次のようになる。(下線部は [NNM] に追加された意図に当たる部分である)

[NNM-S] 行為者  $x$  は、 $\phi$  をもたらすことによって受け手  $y$  に  $\psi$  がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を  $y$  が認識することを意図しており、さら

<sup>6</sup> [NNM] は典型的な、真偽を問うことのできる文の発話 (=陳述) のみならず、依頼、命令、助言、約束などといった発話による行為、さらには「ネジを欲している人物に適切な本数を手渡す」といった行為をもその射程に含んでいる。これらは全て、 $\phi$  という媒体を話し手と聞き手の間にもたらすことによって、聞き手にとって新たな何事か ( $\psi$ ) がもたらされるような行為である。

<sup>7</sup> 引用元の指示詞は「彼が」だが、作例において女性を想定していたため、引用者によって文法性が一致させられている。

に、「その意図を  $y$  が認識することを意図する」というその意図をも  $y$  が認識することを意図しており、これら全ての意図が  $y$  によって認識されることによってこそ  $\psi$  が  $y$  にもたらされるということをも意図している。

このように修正することで、免責不可能性を持たない上のような事例を  $x$  が何事かを非自然的に意味した事例に含まれないものとするができる。なぜならば、キスの依頼を行う事例において行為者  $x$  は  $\phi$  (一連の企てに気づかれるということ) をもたらすことによって  $y$  にキスをしてもらうことを意図しており、 $\phi$  をもたらすことによってキスしてほしいと考えていると認識されることを意図しているが、 $\phi$  をもたらすことでキスしてほしいと考えていると認識されることを意図しているということも認識されることまでは意図していない、すなわち、一連の企てが見透かされることまで実は企てられていたのだということが見透かされることまでは意図していないからである。かくして「企て」の事例を排除するような意図が取り出された。しかし、[NNM-S] のように高階の意図が認識されることを必要条件に追加したとしても、[NNM-S] を全て満たしながらさらに一枚上の意図があるような事例が理論的に想定可能であり、その一枚上の意図を聞き手に認識されることなく第一の意図を達成するような事例もまた同様に想定可能である。したがって、一枚上の意図を持つ話し手による「企て」を排除するために、聞き手に認識されるべき意図を一枚上に追加することによって必要条件を強化するという動きはいたちごとこととなり、永久に終わることがない。このことは Schiffer (1972) をはじめとする複数の論者によって指摘されている。この指摘に従うならば、「彼／彼女は発話によって何事かを本当に非自然的に意味した」という言明が真となるためには、話し手は無限長の文によって語られる入れ子状の意図をすべて意図し、聞き手はその話し手の無限個の意図をすべて認識することによってこそ話し手が第一に意図した反応を示していなければならないということになる。そしてそれは不自然だろう、というのがシファアの立場である。

シファアは、話し手が「一枚上の企て」を意図しているような事例は非自然的意味の事例ではないとする点についてはグライス、ストローソンに合意している。しかし、企ての事例を排除するのに、聞き手に認識されるべき意図を追加するという仕方を選択するのではなく、「相互知識\* (mutual knowledge\*) 」という概念を非自然的意味の定義に組み込むということを提案する。いま  $K_{xp}$  を「 $x$  が  $p$  を知っている」を表す関数とすると、相互知識\* は次のように定義される。

[ $K^*_{xy}$ ] =df. [ $x$  と  $y$  が  $p$  を相互知識\* としている]

$K^*_{xyp}$  iff

$K_{xp} \wedge K_{yp} \wedge K_x(K_{yp}) \wedge K_y(K_{xp}) \wedge K_x(K_y(K_{xp})) \wedge K_y(K_x(K_{yp})) \wedge \dots$  (以下同様)<sup>8</sup>

例えば、話し手と聞き手の見える位置にあるバスが満員であることが確認されているような

<sup>8</sup> Schiffer (1972) を元に簡略化して提示した。



状況では、そのバスが満員であること (p) を話し手 (x) は知っており、聞き手 (y) も同様に p を知っている。さらに、x は y が p を知っているということもわかっているし、y もまた x が p を知っているということを知っている。そして、x は y もまた x が p を知っているということを知っているということをも知識として持っているはずであり、このとき y もまた x は y が p を知っているということもわかっているということをも知識として持っている。このようにしてこの知識の系列は無限に続く連言の式として記述することができる。この無限に続く連言としての知識の系列全体を相互知識\*と呼ぶ。

相互知識\*がこのような概念であるとするれば、[NNM] の前半部分「x は φ をもたらすことによって y に ψ がもたらされることを意図している」が相互知識\*となりさえすれば、企ての事例を排除するために「という意図が認識されることを意図している」という意図を永遠に追加し続ける必要はなくなる。なぜならば、前半部分が相互知識\*となれば「x は φ をもたらすことによって y に ψ がもたらされることを意図している」ということを y が知っているということを x が知っているということを y は知ることになるため、x は「x は φ をもたらすことによって y に ψ がもたらされることを意図している」ことを y に認識してもらおうとわざわざ意図する必要はなくなるからである。したがって、話し手は何事かを非自然的に意味する際には「x は φ をもたらすことによって y に ψ をもたらすことを意図している」ということが相互知識\*となることを単に意図すればよい<sup>9</sup>。こうして無限に続く意図の系列は定義項から消去される。これを [NNM] の形に倣って表記すると次のようになる。

[NNM\*] 行為者 x は、φ をもたらすことによって受け手 y に ψ がもたらされることを意図しており、しかも、その意図が相互知識\*となることによってこそ ψ が y にもたらされるということをも意図している。

この定式化の下では意図の無限系列は発生せず、しかしキスの依頼を行う事例に特徴的であるような「企て」を含む事例を、「x が何事かを非自然的意味に意味した」と言える事例から排除することができる。すると本稿の当座の方針として次のことが言える。話し手が何事かを非自然的に意味したとき、話し手によって少なくとも [NNM\*] が意図されており、かつ、何事かを非自然的に意味した話し手ないし行為者は免責不可能性を持つ。

#### 4. 「非自然的に意味する」ことと「コミュニケーションを行う」ということ

<sup>9</sup> 無限に続く意図の系列を避けるために相互知識\*に訴える解決法については複数の批判がある。その多くは、[NNM\*]の前半部分が相互知識\*となっているか否かは確認に無限の時間を要するために確認し得ず、しかも完全な相互知識\*はそもそも実現し得ないという二点から、[NNM\*]の下線部が達成されることはないということを通り、そうだとすれば話し手はψを非自然的な仕方でも聞き手にもたらすことができなくなってしまうと結論するものである。これについては、何事かを完全に相互知識\*とすることはできずとも、一定の手続きによって何事かを完全に相互知識\*としたことにすることはできることから、本稿は[NNM\*]の下線部は儀礼的に達成されることが意図されているものとし、深くは立ち入らない。詳しくは別稿に譲るものとする。

非自然的意味の定義に関する議論を前節で見た。では話し手が何事かを非自然的に意味するということは、話し手と聞き手との間にコミュニケーション<sup>10</sup>が成立するということとどのように関わるのだろうか。

前節に提示したキスの依頼を行う事例は、ストローソンの提出した抽象的な反例を具体的に書き下したものである。この事例は「話し手が言い逃れをすることができる」という点において非自然的な意味の事例ではないとされていたと考えることができるものであった。ではこうした「一枚上の企て」を含む事例は、「非自然的意味ではないがコミュニケーションである」とは言えないのだろうか。言えないという見解を明示的に述べているテキストに柏端 (2016) がある。柏端は[NNM]を「事実の報告や記述としてなされるコミュニケーションだけでなく、依頼や命令、警告や質問といったさまざまなタイプのコミュニケーション的行為をも、それは適切に特徴付けることができる」(柏端 2016: 49-50) のものであるとした上で、上のような「企て」を含む事例を「複雑な誘導のケース」として位置付け、コミュニケーションではないとしている。また、柏端 (2016) に対する書評論文である三木 (2017) も同様に上記の事例を「コミュニケーションではなく、「複雑な誘導」の事例である」(三木 2017: 45) とし、このようなタイプに属する事例をコミュニケーションではないと断じている。これらが単なる気分の表明でないとすれば、なぜコミュニケーションではないのであろうか。柏端 (2016) はどのようなものがコミュニケーションに含まれるのかを検討する際に、コミュニケーションに含まれない事例として「行為者が受付脇にフラワー・アレンジメントを飾ることによって受付の雰囲気明るくすることを意図し、かつ、フラワー・アレンジメントが雰囲気を明るくする効果を持つことを知らしめようと意図している」という事例を挙げている。この事例において、受付に訪れた人物は「確かに雰囲気が明るくなるが、これ見よがしに飾られては興ざめだ」という評価を下すことができるという点を柏端は指摘する。つまり、「高階の意図はない方が良かった」と評価を下すことがナンセンスにならないという点において、コミュニケーションの事例ではないと主張しているのである。この「『高階の意図はない方が良かった』と評価を下すことがナンセンスにならない」という基準は、「企て」を含む事例にもそのまま適用することができる基準である。すなわち、もしキスの依頼を感じ取った聞き手 y が行為者 x の意図を全て知りえたならば、「そこまでの意図はない方が良かった」と評価を下すことができるということである<sup>11</sup>。これに対し、典型的なコミュニケーションである会話の事例では同様の評価を下すことはナンセンスとなる。話し手が「そのバスは満員だ」という発話によって聞き手にそのバスが満員である

<sup>10</sup> 柏端 (2016) の用語法による。人間が何事かを協調的に伝達する営みを柏端は総称的にコミュニケーションと呼んでいる。その適用範囲はグライスのいう「協調原理」と同じく、言語的なものにとどまらない。本稿は柏端に倣い、「コミュニケーション」という語を人間の伝達行為一般を指す語として用いるが、特に議論に関係するものとして言語的な伝達行為を念頭に置いている。

<sup>11</sup> 柏端自身は「企て」を含む事例を「複雑な誘導のケース」とであるとするための判断基準として明示的に上の基準を採用しているわけではないが、フラワー・アレンジメントの事例を上記の理由で除外している柏端が「企て」の事例を同様の理由でコミュニケーションから除外することは理にかなっているだろう、というのが本稿の立場である。

という信念をもたらしたとき、聞き手があとから「そのバスは満員だという信念を聞き手にもたらそうと意図していることを分かってもらおうと意図していることが知られることを意図しているということに気づかれること」を話し手が意図していたことを知ったとしても、「その4番目の意図はない方が良かった」という評価を下すことは意味不明である。本稿は強力なこの基準を「叱責不可能性」と呼ぶことにする。コミュニケーションは叱責不可能性をもつが、「企て」を含む事例や花を飾ることに別の意図がある事例は叱責不可能性をもたない。

ここまで見てきた議論により、話し手が聞き手に対して何事かを非自然的に意味するということと、話し手と聞き手の間にコミュニケーションが成立しているということは、それぞれ「免責不可能性の有無」「叱責不可能性の有無」という二つの基準の下に典型性条件が与えられていることがわかった。しかしすぐにわかるように、この二つの基準は独立でありながらも、かなりの部分で重なりあっている条件である。非自然的意味とコミュニケーションはそのほとんどの事例において、上の二つの基準を満たす。それでは両者の違いはどこにあるのだろうか。あるいは違いはないのだろうか。

## 5. 嘘は非自然的意味であるがコミュニケーションではない

話し手が嘘をつくような事例について、三木 (2017) による指摘がある。三木は嘘をコミュニケーションの事例として数えない柏端 (2016) に対し、柏端の提出する基準では嘘をコミュニケーションから排除できないとしている。三木は嘘をつく場合の話し手の意図を次のように定式化する。(下線による強調は引用者による)

[LIE] 行為者  $x$  は、 $\phi$  をもたらすことによって受け手  $y$  に  $\psi$  がもたらされることを意図しており、かつ  $x$  は  $\psi$  の内容が偽だと信じており、 $x$  が  $\psi$  の内容を偽だと信じていると  $y$  に気づかせまいと意図している。(三木 2017: 50)

この意図をもつ行為者が、 $\phi$  をもたらすことによって聞き手に対して  $\psi$  を非自然的に意味する、あるいは、コミュニケーションをとることはできるだろうか。柏端の提出するコミュニケーションの基準は、次のような [NNM] の改良版である。

[NNM+] 行為者  $x$  は、 $\phi$  をもたらすことによって受け手  $y$  に  $\psi$  がもたらされることを意図しており、しかも、その意図を  $y$  が認識することによって、さらに、いま述べているこの意図自体をも  $y$  が認識することによって、 $\psi$  がはじめて  $y$  にもたらされることをも意図している。(柏端 2016)

[NNM+] は、初期グライスの非自然的意味に必要とされる後半の意図に自己言及性を追加することで意図の無限後退を回避したものである。この基準は本稿が先述した非自然的意味の基準である [NNM\*] に比べて、企ての事例を排除する力については同じであり、かつそれに伴っ

て [NNM+] を意図する話し手による発話は免責不可能性を満たす。したがって、[NNM+] を満たせば本稿の非自然的意味の基準は満たされることになる。いま、[LIE] の下線部に注目すると、下線部の条項は話し手の $\psi$ の真偽に関する信念であり、そうした評価的な信念は [NNM+] のどの部分とも競合していない上、[LIE] のそれ以外の部分は [NNM+] の第一の意図と同じである。すると、話し手は [LIE] を意図しながら [NNM+] を同時に意図することが可能であることになり、嘘は非自然的意味の事例であることになる。

三木はこの議論のち、柏端は [NNM+] をコミュニケーションの必要十分条件として掲げる限りにおいて、嘘をコミュニケーションでないとする自身の主張を正当化できないとし、その主張が正当であるためには [NNM+] を修正するか、あるいはむしろ嘘を「不誠実なコミュニケーション」として位置付けるべきだということを述べている。しかし柏端は嘘をコミュニケーションの事例として数えない理由を [NNM+] 以外にも挙げている。それは「嘘は、そのそっくり全体が、陳述や報告といったコミュニケーションの偽装である」（柏端 2016: 37）という点である。これは柏端が「複雑な誘導」を排除する理由として明示的に挙げていたものと共通のものである。嘘や誘導は、私たちがまず典型的なコミュニケーションを行なっているという事実に寄生的に成立するような行為である。さらに、寄生的であり、かつ寄生先を偽装しているような対象は一般的に寄生先の一種ではない。このことから、嘘はコミュニケーションではないと結論される、というのが柏端の考えである。ここでひとつアナロジーを述べるなら、「偽札」という概念は本物の紙幣がよく知られている世界で初めて意味を持つような寄生的な概念であり、かつ、本物の紙幣を偽装している。ここにおいて偽札は本物の紙幣の一種ではない。嘘とコミュニケーションの関係はここで言う偽札と本物の紙幣の関係と同じものである、というのが、柏端の提出するもう一つの理由であると考えられる。

さらに本稿はすでに、誘導（＝企て）の事例を「叱責不可能性がない（その意図はない方が良かった、という評価が意味をなす）」という基準によって区別している。嘘に対しても同様に、話し手の嘘に気づいた聞き手は「君の $\psi$ を偽だと信じていることを知られまいとする意図は、ない方が良かった」という評価を下すことができる。この理由から、本稿はこの柏端の提出するアナロジー的な基準を正当なものとして採用する。そして採用したとすれば三木(2017)の指摘を踏まえ自動的に次のことが言える。すなわち、嘘は非自然的意味の事例であるが、コミュニケーションの事例ではない<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> コミュニケーションを [NNM\*]（あるいは [NNM+]）と叱責不可能性の二点のみによって特徴付けようとすると「真なる言明をする話し手が [NNM\*] を意図しつつ、当の言明によって聞き手にユーモアを感じさせようと意図している」といった日常的な事例がコミュニケーションではなくなってしまうと感ぜられるかもしれない。しかし、[LIE] の下線部と上記事例の下線部は達成のされ方が異なる。前者は話し手が非自然的に何事かを意味した時点で同時に達成されるのに対し、後者は話し手が何事かを非自然的に意味したことを理由にして達成されるのである。したがって本稿における「叱責」とは、厳密には「話し手の意図のうち [NNM\*] と同時に達成されるであろう余計な意図に対して聞き手が評価を下すこと」として理解すべきである。

## 6. まとめ

本稿はグライスによる非自然的意味の定義とその改良案を検討し、話し手が何事かを非自然的に意味したと言えるためには少なくとも重層的な意図 [NNM\*] が必要であるということを確認した。次に、話し手が何事かを意味したとは言えないような諸事例について「免責不可能性（すなわち、言い逃れができないという性質）の有無」という基準を設けることで、それらを非自然的意味の事例から排除しようとする動機を正当化した。さらに、柏端 (2016) がコミュニケーションではないと主張する各事例について、「行為者が受付脇にフラワー・アレンジメントを飾ることによって受付の雰囲気明るくすることを意図し、かつ、フラワー・アレンジメントが雰囲気を明るくする効果を持つことを知らしめようと意図している」という事例をコミュニケーションから除外する際に彼が提出した「叱責不可能性（すなわち、聞き手に認識されることが意図されていない高階の意図はない方が良かったという叱責が意味不明となる性質）の有無」という基準をより広く適用することで、嘘や誘導の事例をコミュニケーションから排除しようとする動機を正当化した。最後に、上記の基準を採用したならば、嘘は非自然的意味の事例でありながらコミュニケーションの事例とはならないという結論を得た。この結論は、私たちが日常的に行なっている「何事かを意味する (mean) 」ということと「何事かを伝える (communicate) 」ということの間には違いがあるということを示しているという点で、私たちの素朴な直感を理論的に裏付けるものとなっている。

## 参考文献

- Grice, P. (1957) “Meaning” North Carolina, Duke University Press, *The Philosophical Review* 66:377-388.
- Grice, P. (1968) “Utterer’s Meaning, Sentence-Meaning, and Word-Meaning” New York, Springer, *Foundations of Language* 4: 225-42.
- Grice, P. (1969) “Utterer’s Meaning and Intentions” *The Philosophical Review* 78: 147-177.
- Grice, P. (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge, Harvard University Press, 385pp.
- 柏端達也 (2016) 『コミュニケーションの哲学入門』慶応義塾大学出版会, 105pp.
- 三木那由他 (2017) 「<書評>コミュニケーション・意味・意図 (書評：柏端達也 (2016) 『コミュニケーションの哲学入門』(慶應義塾大学 出版会, 105 頁)」 *Contemporary and Applied Philosophy* 9: 33-65.
- Schiffer, S. R. (1972) *Meaning*, Oxford, Clarendon Press, 170pp.
- Strawson, P. F. (1964) “Intention and Convention in Speech Acts,” North Carolina, Duke University Press, *Philosophical Review* 73: 439-460

## What Is the Difference between «to Mean» and «to Communicate»?

Kinoshita, Soichiro

Keywords: non-natural meaning, communication, lying

### Abstract

The purpose of this paper is to examine some recent attempts to characterize human communication in terms of the utterer's intention, with special attention to what the authors have to say about the act of lying. In section 1, we will look at Grice's account in his early work of events of which it is true to say that the utterer means something, particularly those that Grice would consider to mean something non-naturally. In sections 2 and 3, we will see that the reason why Grice says of Strawson's counterexamples to non-natural meaning, "I do not think [...] indeed that he had meant anything at all", is that the utterer who non-naturally meant something could tell the addressee that that is not what he meant. In section 4, drawing on Kashiwabata's (2016) proposal to conceive of communication as a form of action, we will argue that one of the characteristics of human communication in general is the fact that it would make no sense for the addressee to make an assessment of the utterer's intention. Finally, in section 5, we will show, on the basis of this argument, that Miki's (2017) criticism of Kashiwabata's idea that lying does not qualify as communication is not well-founded, maintaining that lying is an act of non-naturally meaning something, but not communication.

(きのした・そういちろう)